

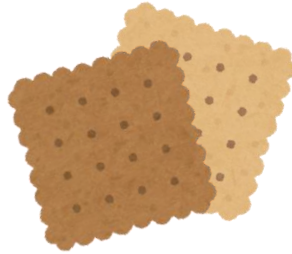
図書館だより



No. 10

平成31年2月8日

節分が過ぎ、みなさんの関心はバレンタインに向けられているところでしょうか。図書館でもいつものようにバレンタインコーナーを設けています。レシピ本だけでなくラッピングの仕方がまとめてある本や作らずに見ただけでも楽しいチョコレートの本も展示していますので色々手に取ってみてください。実は2月には、もうひとつおいしい記念日があるのですが、何の日か知っていますか。それはビスケットの日(2/28)です。今年はビスケットの本を集めた展示コーナーも作りましたので、そちらも見ていってください。



さて、先月には第160回芥川賞、直木賞の発表がありました。今回は上田岳弘氏さんの『ニムロッド』と町屋良平さんの『1R1分34秒』が芥川賞をW受賞、真藤順丈さんの『宝島』が直木賞を受賞しました。これが平成最後の芥川賞と直木賞です。新しい年号ではどんな本が受賞するのか、そちらも楽しみですね。

今年の2月はビスケットも焼いてみよう

596-オ『型のいらないビスケット』 大原 照子 || 著 文化出版局

失敗がなく(焦がさなければOK)、短い焼き時間で作れるビスケットはお菓子作り初心者の味方でもあります。この本で紹介されているビスケットのレシピは型がなくても作れるものがメインとなっているので、「食べたい!」「贈り物に使いたい!」と思いついた時にすぐ作れるのが嬉しいポイントです。ジャムやナッツ、ドライフルーツなどトッピングを変えることで、色々な味のビスケットを作って、日々のおやつとして味わいたいですね。チーズとハーブのビスケットやオニオンとごまのビスケットなど、甘くないビスケットのレシピもあるので、甘党でない人にもおすすめです。

第160回直木賞受賞作

913.6-シ『宝島』 真藤 順丈 || 著 講談社

終戦後、アメリカの統治下に置かれた沖縄。そこでは、アメリカとの終わらない戦争が続いていた。毎日の食いづちも、故郷のゆくすえも、確かなものは何もない。それでも、グスクもヤマコもレイも命を守り、生きる。かつて目の前にいた英雄オンちゃんの姿を今も探しながら。

戦果アギヤとしてアメリカから奪った食糧、薬、日用品を配り回り、誰からも英雄として讃えられていたオンちゃんは、極東最大の軍事基地に乗り込んだ夜、忽然と姿を消した。オンちゃんはなぜ消えてしまったのか、長い長い月日をかけてグスクたちはその真相を解き明かしていく。



芥川賞、直木賞ノミネート作品も読んでみよう



芥川賞、直木賞の受賞作も気になりますが、候補に選ばれながらも賞を逃した作品も気になると思います。これを機に注目されていく作家さんもいることでしょうし、中には未来の芥川賞、直木賞の受賞者となる作家さんもいるかもしれません。みなさん、今から要チェックです。

第160回芥川賞ノミネート作品

913.6-フ『平成くん、さようなら』 古市 憲寿 || 著 文藝春秋

ギャラクシノート、グーグルホーム、UBERと時代の最先端をいく言葉が飛び交うこの小説は、まさに今、私たちが生きている“平成”という時代が散りばめられた小説です。

平成と書いて「ひとり」と読む名前を持つ彼は、平成元年生まれの29歳。名前のインパクトに負けない実力を備え、社会的成功をおさめ、恋人と共に華やかな生活を送っていた。しかし、平成くんは年号である平成が終わるのを機に自らの命を終わりにしようと考えていることを恋人に打ち明ける。戸惑う恋人は彼の思いを変えようと試行錯誤し、次第に彼の心の芯の部分へ近づいていく。

第160回直木賞ノミネート作品

913.6-モ『熱帯』 森見 登美彦 || 著 文藝春秋

これは誰も読み終えたことのない『熱帯』という名の不思議な本をめぐるはてしない物語。

『熱帯』に出会い、『熱帯』を開いた者たちは皆、その物語の世界に魅了される。しかし、『熱帯』は誰にも結末を教えぬまま、ある日突然手元から消えていく。結末を知らされず置いてきぼりを食らった読者たちは必死に失われた本を追いかけるうちに、現実なのか仮想なのかわからない世界に迷い込んでいく。『熱帯』とは何なのか、その結末には何が書かれているのか、誰かその謎を解くことができるのか、読んでいくうちにあなたも『熱帯』に巻き込まれていくはず。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』(B933-オ 河出書房新社)を、この冬休みの間に読むのだと年末に宣言していました。『嵐が丘』(B933-フ 岩波)や『ジェイン・エア』(B993-フ 光文社)を昔読んだ時とても面白かったので、きっと『高慢と偏見』も私には楽しいはず、いつか読もうと思いつつ、日々の忙しさに何十年も放置していたのに気づいたから。ダイエットと一緒に、まずは宣言。ところがやはり、先に読んでしまいたい本が出てきます。バージニア・ウルフの『自分ひとりの部屋』(B934-ウ 平凡社)です。〈女性と小説〉についてと要望された講演の原稿を基に書かれたこのエッセイには、なんという事でしょう、『高慢と偏見』が大絶賛されていました。しかし、さらに気になる本は現れます。サリンジャーの「バナナフィッシュにうってつけの日」の主人公が、7歳の時に家族にあてて書いた手紙があると教わったのです。『このサンドイッチ、マヨネーズ忘れてる/ハプワース 16、1924年』(933-サ新潮) なんという事、ここにも『高慢と偏見』が。流石に、今度は読んでみました。本に急かされる不思議体験でした。【鈴木】

そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ~結城先生編~

司: 去年の企画で『平成No. 1作家』として吉田修一を挙げてくださった時に辻仁成の『海峡の光』もおすすめだとおっしゃっていたので読みました。

結: いかがでしたか?

司: 辻仁成は『冷静と情熱のあいだ』しか読んだことがなかったので、雰囲気が全然違うことに驚いたし、こういうものも書くんだったって思いました。あとは、男同士の憎しみなのか、憧れなのか、っていう感情の揺れ動きが異性としてわかりきれないところがありました。

結: 『海峡の光』は、いじめられっ子だった主人公と、それをいじめていた花井という男が大人になって、刑務所の看守とそこに収監される人として再会するってところから物語が始まるんですね。憎しみやあこがれってテーマだけじゃなく、現代の作家にはあまりない純文学的で重厚な文体や内容に惹かれました。解決したのかわからないラストも余韻を残しますね。読書は人間関係とかそういうことを考えるきっかけにもなると思うので高校生にはいっぱい読んでほしいです。

司: 最近は何を読みましたか。

結: 松本清張の『十万分の一の偶然』です。抒情的な文章がわりと好きなんです。松本清張は論理的な文章で、友だちにおすすめされたので「今年は自分の知らない扉を開こう」ということでさっそく読み始めました。交通事故が発生した瞬間を捉えたカメラマンがいて、その写真をめぐるミステリーです。

司: おもしろそうですね。私、松本清張ってまだ読んだことがないんですね。

結: 古い小説ですけど、スルスルって読めますよ。取材が緻密なので、カメラのことを知らなくても「こういうものなんだな」ってわかるし、物語のリズム感がよくて。

司: 先生方と本の話をするようになって、私は本を読むとき9割くらいはストーリーを重視して読んでいるから、文体とかリズム感がよかったって感想を聞くと、不思議だなというか、読んでいる時に「〇〇先生ならこの本をどう感じながら読むんだろうって気にするようになりました。結城先生はどんなバランスで読んでいますか。

結: 文体が出すぎてもストーリーが出すぎても「うーん」となって、結局いい塩梅のものが好きですね(笑) 比率的には文体に6割、ストーリーに4割かな…。

司: そんな結城先生の最高峰が川端康成ですか。

結: そうですね。「(自分が) 思いもよらない」というのが好きで、ひとつの文章の中に「その発想はなかった」ということが(川端康成の作品には) すごいあるから少し読んだだけでも贅沢な気持ちになるというか、『伊豆の踊子』も、一行の中に十行分くらいの言葉の濃さがあります。絵を見ても「この作者は技術的にうまい」とか「この色の隣にこの色を使うってのは普通ないな」とか、思いもよらないことがあると感動するわけで、川端康成は一文の中に圧倒的な教養と知性と構成力がにじみ出ているので豪華な読書体験をした気持ちになります。

司: 私は『古都』が好きですが、結城先生のNo. 1川端作品は何ですか。

結: やっぱり『雪国』ですかね。せきしろの『たとえる技術』を図書館の新着コーナーで読んだんですけど、ただ「素敵だった」とかっていうよりも、「道端に咲いたたんぽぽのように素敵」とか例えを使うと意味や情景が限定されるじゃないですか。川端康成の例えには「その発想がまずない」というようなすごさがあったりも絶妙に上品。上品というのも大切。さすがの天才的バランス感覚…。物語寄りでも高校生にも読んでほしい品のある

B913.6-ツ 『海峡の光』
辻 仁成 || 著 新潮社

B913.6-マ 『十万分の一の偶然』
松本 清張 || 著 文藝春秋

B913.6-カ 『雪国』
川端 康成 || 著 新潮社

本ならドリアン助川の『あん』。あとは『君の臍臓を食べたい』!

司: わあ! ついに読んだんですね! おもしろかったですか。

結: ミステリーじゃないけど、伏線をしっかり回収してくれるので、読書を普段しない人でも楽しめると思うし、自分の視野が広がる経験ができました。あと、どちらの作品にも食べ物が出てくるんですよ。『あん』はどらやき、『君の臍臓を食べたい』には九州の梅ヶ枝餅が出てくるんです。おいしいものが出てくると楽しめますね(笑)。

司: おいしい食べ物が出てくる本、私も大好きです。「どんな味がするんだろう」と想像して楽しんでます。

結: その繋がりでいくと、よしもとばななの『ハチ公の最後の恋人』もおすすめですね。焼き栗(笑)。爽やかさ100%です。

司: 出てきましたね、焼き栗(笑) 結城先生が自分は本が好きって自覚したのっていつの頃でしたか。

結: うちは父親が出版関係の仕事をしてたので、本に囲まれて過ごしていたんです。父の会社で樋口一葉の日記を全文現代語訳した本を出版したりしていたのですが、樋口一葉の文章って現代文じゃないからちっともわからなかったんですよ。でも小さい頃からそんな本ばかり読んでいたから、文学に親近感があるのかなあ。いつも本の趣味がおじいちゃんって言われます。小・中・高と図書委員でしたしね。

司: 小学生からずっと図書委員! すごい! 司書の先生に薦められておもしろかった本の思い出はありますか。

結: え〜、何かあるかな。中・高寮生活でとにかく娯楽がなかったので文学全集を順に読んでいく“名作文学チャレンジ”をしてみたいんですがそれは先生の薦めがあったからですね。あと阿部公房を薦められたりしました。『砂の女』とか『他人の顔』とか。伊藤桂一の『螢の河』という戦争時代の短編も印象に残っていますね。

司: それはなぜ?

結: 実際にも戦争を体験したとしたら、社会の流れに翻弄される自分の目線で語られるようなものがリアルだと思うんですよ。『螢の河』は「こういう時代だったんだな」というのが主人公目線で生々しく感じられる本でした。悲惨な話ではなかったです。戦争文学なら壺井栄の『二十四の躰』は想像の700倍くらいショックだし意外な展開で悲しかった…。

司: 最近是谁かにおすすめされて読んで「これはすごかった」って本はありますか。

結: ポール・オースターの『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』という超短編がいっぱい入っている本ですね!

司: 結城先生が海外文学を読むのはめずらしいですね。私も海外文学ってまだ全然読んでいない…。

結: 海外文学はまず文化的な土壌が違うから何気ない日常が描かれていてもわからない部分があると、翻訳者の癖とかでわかりにくくなっていることがありますよね。ノーベル賞で話題のカズオ・イシグロが僕は海外文学として1番好きかもしれません。カズオ・イシグロ自身は日本語を話せないけど、日本語訳を作る時に日本人が読んでも違和感のないようにしてほしいということをすごく言っていたらしいですね。

司: 確かにカズオ・イシグロの作品は読んでいて、海外文学を読む時に感じる違和感みたいなものがないですね。

結: 『夜想曲集』と『遠い山なみの光』、あと『浮世の画家』を読みました。『浮世の画家』は絵描きの話なんですけど、小説の中で1番リアルに絵描きのことを書いていると納得できる内容で好きになりました。

司: じゃあ最後に、私はまだ読んでいない長塚節の『土』を今年こそ読もうと目標にしているんですけど、結城先生には今年こそ読んでみようと思っている本はありますか。

結: う〜ん、果てしなきロシア文学(笑)とサリンジャーの作品は読みたいです。現代の作家も読みたいなあ。

913.6-D 『あん』
ドリアン 助川 || 著 ポプラ社
913.6-S 『君の臍臓を食べたい』
住野 よる || 著 双葉社

B913.6-Y 『ハチ公の最後の恋人』
よしもと ばなな || 著 中央公論新社

B913.6-I 『螢の河』
伊藤 桂一 || 著 光文社